



Title	A. フィレンツォーラのノヴェッラ紹介
Author(s)	米山, 喜晟
Citation	大阪外国語大学論集. 1993, 9, p. 185-212
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79609
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

A. フィレンツォーラのノヴェッラ紹介

米 山 喜 晟

第一章 作者とその主要な作品について

筆者は14年前大阪外国語大学に転勤して以来、イタリアのノヴェッラについて紹介と分析を試みて来たが、今春それらをまとめて鳥居正雄氏との共著『イタリア・ノヴェッラの森』¹⁾を刊行し、中世からルネッサンス期を経てバロック時代に至るまでのイタリアのノヴェッラの発展過程をおおまかな形で紹介することができた。献呈した人々の多くから将来の研究に利用したいというお言葉を頂いたのは、たとえ外交辞令だとしてもこの分野への意外に広い関心の表れだと受け取ることにしたい。しかしまだ膨大なイタリア・ノヴェッラの蓄積のごく一部分に触れ得たに過ぎず、その全体像の輪郭を紹介するには程遠い有様である。そこで当分はその目立った欠落部分だけでも補い、わずかでもその全貌に近付いておきたいと考えている。とりあえず本論では、16世紀前半に『デカメロン』式の額縁を復興させ、この世紀のノヴェッラ集の枠組の発展過程に一転機を示したアーニョロ・フィレンツォーラ (Agnolo Firenzuola) のノヴェッラの紹介を行うと共に、そのノヴェッラの特徴について多少の考察を行っておきたい。

まず主にエウジェニオ・ランニ (E. Ragni) 監修の『アーニョロ・フィレンツォーラ レ・ノヴェッレ』²⁾に掲載された「伝記に関するノート」³⁾、アドリアーノ・セローニ監修の『アーニョロ・フィレンツォーラ 作品集 (Opere)』⁴⁾の「伝記・文献ノート」⁵⁾、およびヴィットーレ・ブランカ編著『イタリア文学批評辞典 (DIZIONARIO CRITICO della LETTERATURA ITALIANA)』⁶⁾の記述に基づいて作者についての簡単な紹介を行うと、アーニョロ・フィレンツォーラは1493年9月28日に(セ)バスティアーノ・ジョヴァンニとルクレツィアの間の子としてフィレンツェのサン・ピエル・マッジョーレ教区で生まれた。セローニによる父方はまだ1450年ごろフィレンツェに移住した、一応メディチ家とも仕事上の関係のある⁷⁾公証人の一族に過ぎないが、母方の祖父アレッサンドロ・ブラッチェージはフィレンツェ共和国書記官や駐シエナ大使を勤めた当代の名士で、そうした背景を持つ一応恵まれた境遇に育ったと言えるであろう。シエナとペルージャで法律学を学び、1516年にペルージャで法学士号を得ている。シエナ滞在当時シエナの名家の一員で言語論争に関係のあるクラウディオ・トロメーイ、ペルージャではかの悪名高いピエトロ・アレティーノと交際したことがあったらしく、必ずしも学業に専念していたわけではなさそうである。ペルージャには1514年に移っている。学位取得の後間もなく、フィレンツェ近くの霊場として名高いヴァッロン

ブローサ修道院の修道士となって聖職に入り、おそらく法律知識と毛並みの良さを評価されてこの修道院の代理人としてローマに滞在した。ランニはおそらく本人の意志よりも父親の希望によるものと記して⁸⁾、多分ローマ派遣までも計算に入れて彼が修道院入りしたのだと考えているが、その推理は当たっているのであろう。かくして彼は1518年にメディチ家出身で気前の良い芸術家保護で名高い法王レオーネ十世が治めるまさにルネサンスたけなわのローマにやって来て、ピエトロ・アレティーノ等との旧交を暖め、ローマに群がったルネサンスの文人達との交際を始める。ただし父親の深慮遠謀に基づき周到な人生設計の一部として計算されたいローマ滞在も、病氣（後には梅毒に苦しんでいるが、この時期の病名は確かでない）の治療に追われて、当初期待された程の大した成果を挙げることは出来なかったようである。

1521年のレオーネの死とアドリアーノ六世の法王選出は、フィレンツォーラを含む文人達の夢を砕いたらしく、彼は一時期ローマを去ってフィレンツェに戻ったようだが、1523年のアドリアーノの死とレオーネと同じメディチ家出身のクレメンテ七世の法王選出は、フィレンツォーラに再び希望を与え、彼はローマに戻ると、ベンボ、デッラ・カーサ、トロメーイ、アレティーノ、ベルニ、アッコルティといったルネサンスの大物文人との交際に耽りつつ、文筆活動に熱中する。当時イタリア語論争の一方の旗頭ジャンジョルジョ・トリッシノが提唱したアルファベット表記のシステムについて、その意見を全面的に否定する『トスカーナ語に必要なく追加された新しい文字の追放』⁹⁾というパンフレットを刊行することによって、彼は1524年にデビューした。その後の二年間に彼は優雅な粹組を持っているノヴェッラ集『愛の談義 (Ragionamenti)』の創作やアプレイウスの『黄金のロバ』の翻訳を行って、彼の生涯における最も生産的な時期を迎えたと言えるだろう。その背後には作品中コスタンツァ・アマレッタという仮称で呼ばれる女性との関係が、刺激剤として作用していたとされているが、この女性のことはその実在すら疑われる程、よく分からない。しかし一説ではフィレンツェ出身の彼の親戚の娘で、法律家と結婚させられた女性だとされている。フィレンツォーラはローマ滞在から自分は何一つ物質的利益を得なかったと嘆いているが、実際はフォンティステルニのサン・ロレンツォ教会の聖職禄、サン・ベネデット・イン・アルペおよびサンタ・マールシア・イン・スポレート修道院の修道院長の地位等が法王によって与えられているという。それらが実際にはどの程度の価値があったのかは不明だとは言え、全然成果がなかったとは思えない。

謎の愛人アマレッタの死、彼の創作や翻訳に対する周囲の冷淡さ、まだ1527年のローマ劫掠以前とはいえ（実はランニは奇妙にもまだ起こっていない劫掠後のローマの生活の危機までをその理由に挙げている¹⁰⁾のだが）何かに食わないローマの状態、さらに1526年に彼を襲ったという梅毒感染等がフィレンツォーラに文筆活動や世間との交わり、そして聖職者としての日々の勤めさえも放棄させ、修道院に対する誓約の解消を願い出て1526年5月4日に許可されているという。とにかくその前後にせっきく好調に展開しつつあった筈の創作や翻訳活動はどうやら一旦頓挫しているようである。セローニは否定しながらもフィレンツォーラが調子に乗って羽目を外したため、教会側がお叱りとしてこうした文書を与えたとする推測があることを記している¹¹⁾。しかし聖職禄を完全に

失ったわけではなく、生涯ヴァッロンブローサの聖職禄もしくはその年金を失わなかった。いずれにせよ突如文筆活動は低調になり、その居場所さえ確実ではないが、1529年にトロメーイに呼ばれてポーニャの宗教会議に加わったり、1530年ごろローマのアカデーミア・デイ・ヴィニャイオーリに加わり出席しているので、やはりローマの法王庁の周辺で細々と日々を送っていたもののようである。しかし1534年のクレメンテ七世の死と共にローマで暮らす理由がなくなり、1538年以前に（ランニは1539年とする）プラートに転居、ヴァッロンブローサ修道院の末寺サン・サルバトーレ・ア・ヴァイアーノの聖職禄で生活した。1540年から42年にかけて健康状態が改善するとともに『チェルソあるいは女性美に関する対話』や『動物達の対話の一枚目の衣装』等の散文の創作、『牧人の犠牲』、『ナポリの若き貴族の死に寄せる涙』等の詩作、二つの喜劇、短いバーレスクな恋愛詩の数々、ホラティウスの『詩学』の翻訳等の作品を書き残した。特に動物達の対話はサンスクリットの動物寓話『パンチャタントラ』の翻案とは言え、フィレンツォーラの独創も見られ、文章も優れていて、彼の最大傑作の一つとされている。またこの時期「アカデーミア・デラッディアッチョ（Accademia dell' Addiaccio）」という、会員が神話の牧人の名を仮称に選んでいる点で、18世紀のアルカディア学会の先駆のごとき学会を結成して、盛んに入出入りしたとされている。

しかし1538年父（セ）バスティアーノを失い、その遺産をめぐって弟達特に妹アレッサンドラとの争いが生じ、また修道院との関係も悪化し、ヴァイアーノの聖職禄が打ち切られて年金に転換される等の不愉快な事態が生じて、文筆活動も頓挫してしまう。それでも活動は細々と続けられ、1543年ヴァルキ宛てに献呈されたカピートロ（三行連句の詩形）『渇きの賛美』が絶筆とされ、その後間もなく恐らく6月27日と28日の間に貧窮のうちにひっそりと死んだとされている。死後13日も経ってその死を知らされた弟達はそれは「有益で金になるよりも無益で損害をもたらす」¹²⁾という理由で、兄の残した遺品や遺産の受け取りを拒否した。彼の死は長く世間に知られていなかったのも、彼がローマに移ってまた活動を開始するという噂が流れていたという。なおこうした生涯から生まれた作品の中で、彼の生前に活字を用いて刊行された作品は、トリッシノを批判した処女論文ただ一篇だったとされているので、生前の彼は当時の印刷業界から意外と無視されていて、それ以外の作品はすべて死後に刊行されたことになる¹³⁾。

以上で瞥見したフィレンツォーラの生涯は、ジラルディ・チンツィオ等多くのノヴェッラ作家の生涯と同様、何とも冴えない惨めな一生である。特にフィレンツォーラの場合には、少しつき始めたかと思うとすぐ失速してしまうその足取りの不確かさ、逆境に対するひ弱さが一つの特徴だと言えそうである。おそらく基本的には才能の乏しさに基づいていると思われる頼りなさが、筆者などにはむしろ興味深く感じられるのであるが、当然その作品も多いとは言えない。それでも50年の生涯に書き残した作品は、サンソーニ社の一卷本の注等を含めると1000ページ以上の作品集を構成する分量に達している。なお参考のためにそこに収められた作品のタイトルとページ数（フィレンツォーラが執筆した部分のみ）を示しておく。

作品名（下線部は純粋なノヴェッラ，点線は翻訳および翻案）	ページ	ページ数
『トスカーナ語に必要なく追加された新しい文字の追放』	11-28	18
『 <u>愛の談義</u> 』	37-172	136
『女性を称えるクラウディオ・トロメーイへの書簡』	177-184	8
<u>アブレウス『黄金のロバ』</u>	197-437	241
<u>パンタチャントラ『動物達の対話の一枚目の衣装』</u>	445-518	74
『チェルソあるいは女性美に関する対話』	525-600	76
『 <u>プラート時代のノヴェッラ二篇</u> 』	607-624	18
喜劇『ラ トリヌーツィア』	629-669	71
同『イ ルーチディ』	701-771	71
詩『自分の病氣（梅毒），牧人の犠牲，スタンツェ，涙等の詩篇』	781-856	76
同『愛の詩と様々な主題の詩』	857-944	88
同『カピートリ こっけい詩と風刺詩』	945-998	54

作品の冒頭にタイトルが記されていない場合にはタイトルのページを含めて計算しているので、多少の誤差が認められるが、献辞等も含めてフィレンツォーラの執筆した部分（これはフィレンツォーラの文学活動のはぼすべてと見なし得る）は全体で931ページに及ぶ。その内で創作のノヴェッラは154ページ（全体の16.5%）に過ぎない。翻訳と翻案はその約2倍の315ページ（33.8%）で、フィレンツォーラの文学活動の中心は翻訳や翻案だったとみなし得るようである。しかしそれらは内容的にはノヴェッラとかなり類似していること、ノヴェッラと翻訳類を加えると全著作のちょうど半分に達すること、残りは詩（長詩，短詩），喜劇，評論等多岐の分野に分かれることを考慮すると、やはりノヴェッラ，物語，説話等の分野こそこの作者の本領であり，未完も未完，36話の予定が8話しか残っていないとはいえ、『愛の談義（ラジョナメンティ）』を彼の代表作とみなす常識的な見方が，基本的に誤っていないと言えるであろう。

第二章 『愛の談義（ラジョナメンティ）』の『デカメロン』型額縁

筆者はかつて『イタリア学会誌』誌上でイタリアでは一時期下火になっていた『デカメロン』型の額縁，つまり複数の男女あるいは男性達や女性達が一堂に集まって交互に物語を語るという形式の作品の枠組が，フィレンツォーラの『愛の談義（ラジョナメンティ）』と共に復活して，その後グラッツィーニ，パラボスコ，ストラバローラその他多数の16世紀のノヴェッラ作家によって採用され大流行したことを指摘した¹⁾。さらにその理由を考察して，グリエルミネッティの著書²⁾ですでに指摘されている当時の古典フィレンツェ語文獻重視の風潮にともなって生じた『デカメロン』再評価の機運の影響に加えて，印刷術というメディアの革新によってノヴェッラ集の需要が増大し

たことが、16世紀の作家達にボッカッチョが考案した額縁が有するノヴェッラ編集上の便利さを発見させたのではないかという推論を行った。ただし前章で見たとおり、フィレンツォーラの場合はそれほど印刷屋の存在が身近ではなかったようである。その代わりに彼にとって意味が大きかったのは、同郷のメディチ家出身で決して知らない仲ではなかった法王クレメンテ七世の存在だったと言えるのではないだろうか。つまりすでに一度やはりメディチ家出身のレオーネ十世の死による状況の変化を体験しているフィレンツォーラは、クレメンテ法王の在世中に作品を仕上げるのと、仕上げないのとでは、その成果に大きな差があることが身にしみて分かっていたからである。このようにある限られた期限内でノヴェッラ集の完成を目指している状態は、ヴェネツィア等の印刷業者にせき立てられてノヴェッラ集の完成を目指した後のノヴェッラ作家達の心理状態と似ていたと言えるであろう。この場合忘れてはならないのは、今日と違ってノヴェッラのオリジナリティが今日ほど重視されず、剽窃が大した問題とされていなかったという事実である。どんなに優れたノヴェッラ集でも必ず過去と類似のモチーフが多数現れざるを得ない上に、ほとんどそのまま他人の作品を借用しても、訴えられることも罰せられることもない以上、ノヴェッラをまとめるための受け皿となる一応の枠組は、今日よりもはるかに重要な価値を有していたわけである³⁾。また作者のオリジナリティ自体も、ノヴェッラのモチーフ自体がまるで貨幣のようにノヴェッラ集からノヴェッラ集へと流通していたため、ノヴェッラ自体にそれを刻印することは困難であったため、おのずから枠組とりわけ額縁の部分に刻み込まれることとなった。つまり作者は枠組とりわけその額縁に凝らざるを得なかったのである。そこでまずこの世紀のこうした流行の口火を切ったとされているフィレンツォーラの『愛の談義 (ラジョナメンティ)』の額縁を、前章でも用いたランニ監修の版で眺めて見ることにしよう。

カメリーノ公妃マドンナ・カテリーナ・チーボ夫人あての献辞 (pp. 9-13)

かつて一人で努力することと、何人かとおしゃべりすることと、いずれがより有益かと考えた時、孤独こそ最高の名誉に導いてくれると信じました。ところがその後ローマのアカデミアの精華達があつまるラヴェンナ大司教(ピエトロ・アッコルティとされる)の食卓でこの疑問を論じた結果、本を読んでいるだけでは大した成果は期待出来ず、対話から学ぶことがいかに大切であることを悟り、またその後実例を見て納得するに至りました。そうした生きた文芸の効用をお見せしたいと考えて、思い切ってささやかな贈り物を差し上げる決心がつきました。何卒快くお取り下さい。そしてお暇な折りにご自分でお読み下さるなり、誰かに読ませてお聞き下さるなりして下さい。

カメリーノ公妃へ、アーニョロ・フィレンツォーラの『愛の談義 (ラジョナメンティ)』について、第一日、序文 (pp. 14-17)

もし私が自分の亡き恋人(コスタンツァ・アマレッタ)への感謝を他ではなくここで書いていたら、序文を書く所かその美德や彼女を失った自分への同情を求める言葉を書き連ねて、非難されっぱなしだったでしょう。しかしそれは他で済ませましたので、涙はひとまずおいて楽しい小道に入

りましょう。かの夫人はお亡くなりになる前、それは大して以前ではありませんが、(ローマからフィレンツェへ来て、そこで出会った)二人の貴婦人と三人の若者と共にフィレンツェから遠くないところ(田舎の別荘)でなされたおしゃべりをまとめておきたいとお考えになりましたが、その直後熱病に取りつかれ、私にその仕事を仕上げるように命じた後、神様のもとに帰られたのです。だから若い貴婦人達よ、私のためだけではなく、この仕事を私に命じられた彼女のためにこの作品を読んで下さい。(以上執筆の動機、p. 17までの外枠)

(p. 18以下額縁の部分) フィレンツェのすぐ近くの緑の丘に、東西南北いずれも1000歩そこそこのパゾラティコという谷があり、美しい小川が流れ、いくつかの泉から豊かに水が溢れ出ている。そこには立派な宮殿が聳え、農作物も狩りの獲物にも恵まれていた。そこに品良く才知すぐれたチェルソ (Celso) という青年がラ・スカーラと呼ばれる丘の上にフィレンツェを一望出来る立派な宮殿を持っていた。1523年にゴ(ママ=コ)スタンツァ・アマレッタ (Gostanza Amaretta) というローマの貴婦人がフィレンツェのアヌンチアータ教会の「受胎告知」のフレスコ画を見に来た時、彼女の親戚でもあり久しい友情でも結ばれていたチェルソの親族は度々彼女と会ったが、その度に彼女から皆でおしゃべりを楽しむ機会を持ちたいという希望を聞かされた。チェルソは二人の親族の若者の要望を聞き入れて、ゴスタンツァを谷間の村の邸宅に招くことに決め、妹と弟の妻をも誘い、4月26日に3人の女性 (Gostana, Bianca, Fioretta) と3人の青年 (Celso, Folchetto il Corfinio, Selvaggio il Plozio 何故か男性の二人は別名を持つ) が多くの男女の召し使いや従者と共に田舎の別荘に来る。ゴスタンツァは別荘が気に入り、フィレンツェ人の別荘はイタリアで最高だと認める。チェルソは休息のため各自の部屋で休ませるが、適宜時を過ぎると一同は呼ばれない内に戸外に出て自然に親しみ、オリーブの下に集まり、養魚池で魚を取ったり、花を摘んだりして遊ぶ。ひとしきり遊び終えたころゴスタンツァがボッカッチョの例に倣おうと提案した。一同は賛成しゴスタンツァに女王になるよう勧める。

ゴスタンツァは断わるが、結局ローマで返礼したいという理由で引き受け、一日の過ごし方について提案。6人で6日間滞在する予定で、朝は才知が冴えているので丘を散歩して哲学について話し合う。家に戻ると楽器の演奏や歌を楽しみながら食事を取り、寝室か適当な場所に移って各自前夜与えられたテーマについてのカンツォーネを歌う。それが終わるころには陽が沈み始めるので、近くの泉か川岸に集まり各自一つずつノヴェッラを語る。終わると晚餐が必要となるので食堂に戻る。晚餐後おしゃべりを楽しみ眠りを取る。

以上でこの作品の中でノヴェッラが語られるに至った事情、つまりノヴェッラ集の構成が予告された訳であるが、作者はこの作品を単なるノヴェッラ集に止めることでは満足せず、様々な学問の断片や、恋愛に関する論議、各自が創作して歌ったとするカンツォーネ等を額縁の最初の部分に盛り込んだため、一日目の序文だけでこの作品の今日残された部分の約3分の1に達している。以下でその主題だけをごく簡単に紹介する。

女王はまずこの作品の基本となっている6という数字の重要性を説き始め、それが28等と共に完全数であり、またその約数3やその二乗9（妊娠期間は9か月等）の重要性を説く。女王は6の約数の2の3乗は8、3の3乗は27、両者の和35に元の6をかけると210で、210日は7か月に当たり、胎児は7か月母胎にいれば安全に生まれるから6は有り難い数なのだ等とのたまう（このことばの背後にはプルタルコスの「8か月子は死ぬが7か月子は育つ」という意味の言葉があるということである⁴⁾）が、この理屈自体に関しては、こじつけという印象は否み難い。作者自身そのことを自覚していたので、フォルケットが絶妙のタイミングで「妻を連れて来なくて良かった。7人になってしまうから」と皮肉り、ピアンカから「あんたが残って奥さんに来てもらえば良かったのに」とやられている。セルヴァッジョも「女王なら7でも立派にほめますよ」と述べる。

食堂に戻ると、女王はチーズを見て物思いに沈む。彼女は訳を問われて、ローマでそのチーズのある席で美しいカップルに紹介され、それ以来そのチーズを見るとその美しさを思い出すのだと言い、同様に卑俗な題材から上品な詩を作った作者として、チェルソにセステーナを希望した。チェルソは忘れた等と断った後ついに引き受けた。（チェルソのセステーナ）作者の故郷の羊飼いの谷間の田園風景。作者はゴスタンツァにその詩を捧げ、テーヴェレ川もアルノ川も水源は同じだと覚えていてほしいと頼む。こうしてチェルソのセステーナが賞賛とともに終わると一同は床に就く。

その翌朝夜が明けるや否や、半マイル先の丘に向かい、一同は木の根っこに腰を降ろし、皆に勧められた女王は、自分の生い立ちと恋愛を語り始める。「私はフィレンツェの名門の両親からローマで生まれたが、富と肉体の安楽のみを考慮して、金儲けのことにしか関心を持たない〈法律の販売人〉と結婚させられた。夫は私から子供を希望していたので、やさしくしてくれたが、そうでなければ今頃は憎み争っていただろう。しかし一度もひどい言葉を交わしたことはない。夫に満足できない私を哀れみ給うた愛の神はある優美な青年に私の美点を示され、私達の間には愛が生じ二人で美德の山に登った。」さらに女王はプラトン派の教えによると、愛には天上的な愛と地上的な愛の二種類があり、後者は肉体的なもので結婚を基礎とし欲望に基づいて子供を生むが、魂に作用して天上の香りに満ち人を美德へと向かわせる前者とは比較にならないと説く。フィオレッタは自分が求める美は他人の肉体に見出されるので、美を求めることで過ちを犯すおそれがあるのではないかと反論する。女王は肉体は魂の容器に過ぎないので、魂の美は肉体に隠れている。もし二つの液体があって、金と銀の容器を持っている時、上質の液体を当然金の方に入れるであろう。肉体よりも魂が優れている以上、肉体の愛よりも魂の愛の方が上質で、恋にはどうしても魂の美が必要なのである。他方自然は人類を作り、生殖のために男女の別を作ったので、異性を見ると快楽の望みが生じる。しかしやがて人間は、肉体の美を通して魂の美を知るようになる。異性への愛は美德への案内手段、立派な行為の原因として役立つのだと説明した。さらに自然に反した同性愛ほど忌まわしく不名誉なことではないと非難した。

フィオレッタは愛は分けられないと聞いたが、夫と恋人とを同時に愛することが可能かとたずね

た。女王は愛は二重だから、肉体の愛で夫を愛し魂の愛で恋人を愛することは可能だが、肉体の恋に溺れると魂の恋を忘れがちだと答えた。しかし『デカメロン』のチモーネの例のようにどんな卑しい人間でも魂の恋は可能だと加えた。また夫や妻に魂の恋を抱くことは可能かという疑問を予想して、夫や妻は子供を作ったり、衣食住を用意するための存在だから、夫は妻以外の女、妻は夫以外の男に魂の恋をするものだとのたもうた。

ビアンカが肉体の美がまず恋に目覚めさせる原因だとすれば、それはすぐ衰えてしまう。そんなに明日まで持たないものを愛するのは愚かなことではないか、と質問した。女王は、ビアンカは恋に無理に反抗しているが、逆らってはならないとさとし、相互の愛が生じ長い交際で成功した場合、相手の肉体の美ではなく魂の美を愛しているので、相手の皺や白髪では気持ちは変わらないという。セルヴァッジョは先に愛が人を恋させるといいながら、後に相互の認識から愛が生まれるとした女王の言葉に、まだ生まれていない愛がなぜ人を恋させるのかという疑問を呈した。女王は恋を人を動かす知性とその動きから生じた好意という二つの仕方で考えるように教えた。再びビアンカが「もし恋人が不正なことを強いたら断わるべきか」とたずね、女王は真の恋は徳高い魂の内にあるのだから、真の恋人は不正な事を強いたりはいしないと答えた。

チェルソが友情と恋愛とはどう違うかと問うと、女王は友情は大体同性間で結ばれつまらぬ者同士でも生まれるが、恋愛は異性間の徳の高い魂同士で結ばれる。愛は美により友情はつまらぬ事から生まれる。本来友情は被創造物間のものだが、愛は創造主と被創造物との間で生ずるもので、我々を高め洞窟から引き出して都市に住まわせる動因となった、神の恵みなのだとする。

そこでフォルケットは、女王の愛の描き方は変だと批判し、巨匠の手になったとは思えない、この議論は処女の尼さんか修道院長向きだと酷評し、あなたが天上の恋を取って私に地上の恋を残しておいてほしいと冷やかす。女王はあなたのは恋ではなく欲望だと答えた。

こうした対話の後に一同は別荘に引き上げ、休息し、手を洗い、食卓についた。

食卓でリュートが何よりも好きな女王は、その名手セルヴァッジョにリュート、ビアンカにヴィオラの演奏を頼み、セルヴァッジョにカンツォーネを歌うよう依頼した。

(セルヴァッジョのカンツォーネ) 女性への恋に捕えられて、自分は彼女に似るため心を名誉の方に向けた。彼女の瞳に貞潔、胸に善良を見た私は天国にいる思いがした。

ビアンカはそういうものをこれまで聞いたことがないので、セルヴァッジョが自分で作ったのではないかとたずねると、彼はそうだと答えた。そしてペトラルカの前例しか許さない立場かと問い返し、それ以後詩の創造を巡ってビアンカとの対話が交わされる。穏健に改革の行き過ぎを恐れるビアンカに対して、セルヴァッジョはペトラルカも誤ることがあり、ダンテは新しいことをしたとして大胆な創造の自由を主張した。

フィオレッタはセルヴァッジョが非難に値するとしてもせいぜい新しい衣装を考案した人と同程度だと認める。女王は面白がってフィオレッタに新しい衣装を見たいと望む。

(フィオレッタのカンツォーネ) 愛が創造主を動かしたので、神は肉を着て人類を救済に降りて来

られた。徳が再び頭をもたげ、私は晴れ晴れと目を覚まして鏡の中の自分の魂に「汝は神のお側にいる」と告げる。

女王が自分はローマに住んでいるが、トスカーナ人は自分の言葉を自慢しながら誤ると述べ、フィオレッタが用いた *stento* (困難、苦労) という言葉を例に挙げる。フィオレッタはそれに反論して、自分は恥じるどころか、トスカーナ語の詮索があまりにも厳しいことを批判し、ホラティウスの『詩学』の意見やカトー、エンニオ等のローマ人の例を挙げて、たとえペトラルカが用いたことがなくても、必要に応じて新しい言葉を使うことが許されると主張する。女王がそれではペトラルカ以外の誰を基準にすれば良いのかと問い返すと、フィオレッタはギリシャ語やラテン語等の古典語とイタリア語のような日常語とでは事情が違うとして、たしかにペトラルカ、ボッカッチョやモルツァ、トロメーイ等をお手本にするのは悪いことではないが、だからと言って彼らの先例という狭い輪の中にとじこもっている必要は全くない。キケローはカトーの演説を何度となく読んだことを告白しているが、その範囲内にとどまらず新しい言葉をどんどん採り入れて未曾有の高い水準にラテン語の表現を引き上げた。だからたとえペトラルカが用いた事がなくても、*stento* という言葉を用いることは許されていると結論を下す。女王はそれ以上反対すべきでないと考えて何も言わずチェルソを指名した。

(チェルソのカンツォーネ) それ以上を望まない天上の愛、魂の愛の賛美、第三天の光によって熱せられた自分が、白い手に導かれ確実に美德への道を進むようになったこと。

余りにも悟り済ましたチェルソの詩を聞いたフォルケットは誉めながらも、ビアンカの詩を聞こうと提案した。そこでビアンカは女王の指名を受けた後歌い始める。

(ビアンカのカンツォーネ) 若くて美しい自分が一度も恋の矢に当たったことがないこと。堅すぎるといふ考え。逃げて縛られるなという考え。徳を求め真につこうとする者は賢い恋を同伴者とせよという考え。恋への恐れ。時期尚早に結果を求めるのは愚かである。

一同は声とヴィオラの音の素晴らしさ、そして特に知性と意志とを代表する考えの争う様子に感嘆した。女王はビアンカをオルフェーオの再来と褒めたたえてフォルケットを指名。

(フォルケットのカンツォーネ) 獣達や鳥達よ、お前達は愛と共に楽しく生きている。ここで私の婦人の瞳と会い、心は燃えた。だから私はここへ戻って来る。自分が感じた喜びを歌えればいいなあ。愛をいやがる女達も心を燃やすだろうに。

フィオレッタはフォルケットの作品中の *chiunque* が二音節として用いられているのに対し『天国篇』、ペトラルカが三音節で用いていることを指摘した。フォルケットは権威は一つではないと反論。ペトラルカの作品でもフィレンツェの1515年版では二音節として用いられている例がある。トスカーナの慣用では *chiunque* は *cinque* と同じとみなされていて、むしろ二音節として扱うべきだという。ペトラルカは詩人なので許されるが、普通は当然慣用に従って二音節にすべきだと断定した。最後に残された女王は自分は皆より優れていなければならないのについていくのがやっとだと謙遜しながら、カンツォーネを歌い始める。

(女王のカンツォーネ) 晴れた日若い女が花を摘みに行くのに会くと、彼女は私に「汝を燃やす美しい魂が汝の許に戻った」と告げた。するとあたり一面真っ赤になった。その時高貴な若者が私を救った。彼に「親切な若者よ、どんな幸運がわたしにあなたの美しい顔を見させてくれたのですか」と問うと、彼は「それは愛の使いです」と答えた。

歌い終わった女王は人がなにも言わない内に、チェルソに向かい、陽が落ち始めたので、ノヴェッラが話せる所へ行こうという。彼は Campettoli と呼ばれる、丘のはずれの斜面の泉の水に反映している木陰へ皆を案内した。女王は話がはめを外さないよう注意した後、カンツォーネの場合のようになっては困るからと、真っ先に話し始める。今日の論議の話題はすべて愛についてだったので、ノヴェッラも愛について話す事にしよう。自分は完全でない地上の愛から話したい。ただしそれに友情を混ぜても良い。それによって天上の愛の素晴らしさが想像出来るからと語り始めた。

以上で序文は終わるが、第一日目に6人が各自一篇ずつ語り終えた後の語り手同士の対話はやはり額縁の一部である。しかしその部分は次節で簡単に紹介したい。

第三章 『愛の談義(ラジョナメンティ)』の8篇のノヴェッラ

すでに前章で見ておいたとおり、当初この作品は6人で6日間ノヴェッラが語られる予定で、もし予定通り完成しておれば全36篇が残される予定であったが、今日残されているのは第一日目の6篇と第二日目の最後に予定されていたらしい2篇の計8篇にすぎない。残りはどうなったかについては、もちろん確証はあり得ないが、死後5年後の1548年にフィレンツェの有名なジュンティ (i Giunti) 印刷所から刊行されているので、(奇妙なことにその版の監修者 Ludovico Domenichi は完成した後に散逸したように記しているりが) 完成していたものがフィレンツォーラの死後わずかの間に散逸したとは到底考え難く、今日の定説では当初から書かれなかったと見なされている。おそらく額縁作りに熱中し過ぎて、肝腎のノヴェッラの創作がお留守になったと考えて差し支えあるまい。そこでまず8篇の作品の粗筋を紹介しておきたい。なお途中の語り手達のやりとりは紙数の都合で省略する。

第一日第一話(語り手 女王)すでに遠い過去のこと、フィレンツェに古い貴族の二人の青年、Niccolò degli Albizi と Coppo Canigiani は親友だったが、Niccolò の叔父がスペインのヴァレンシアで彼に遺産を残して死んだため、その遺産を受け取るため二人でスペイン旅行を計画した。だが突然 Coppo の父が病気になる間もなく死去して、Coppo は旅行を中止せざるを得なかった。Niccolò は一人で出発、ジェノヴァから船に乗ると、約100マイルのところで嵐に会い、チュニジアのスーザの近くに漂着したが、チュニスに連れて行かれ、奴隷に売られた。Lagi Amet という人が彼を連れて戻すが、その若い妻は彼に恋してしまいついには彼に気持ちを打ち明けた。Niccolò はキリスト教に改宗するよう希望。女はついにそれを受入れて、ひそかに洗礼を受け彼の妻となる。他方

Coppo は友人の災難を知ってお金をふんだんに使い、船でバルベリアの海岸近くを航行してついに偶然海岸にいた Niccolò とその女主人に巡り会い、次の日に会うことを約束して別れた。Niccolò は女主人に恋を終わるか、一緒にイタリアへ逃げるかを選ばせるが、彼のイタリア、特にフィレンツェは素晴らしいという説得が功を奏し、翌朝宝や金銀をまとめた女は Niccolò と Coppo の船に乗り込み駆け落ちした。船が半マイルまで来た時女主人の出奔に気付いた家の人々は大騒ぎしたが、後の祭りだった。三人は無事シチリアにたどり着いたが、旅慣れない女のためメッシーナに上陸すると、たまたまチュニス王の使節が来ていて女を目撃し、面識があったためシチリア王に談判して三人を祖国に連れ戻したいと要求した。たまたまチュニス王の協力を必要としていたシチリア王はその要求を受け入れ、三人はチュニス大使の船に捕えられた。ところが帰路再び嵐に襲われ船はリヴォルノに漂着してピサの海賊の手中に落ちた。三人は自分の身柄を買い戻して祖国に戻り、サン・ジョヴァンニ洗礼堂で再度洗礼を受けた女には Beatrice という名前が付けられ、厳粛に結婚式を挙げる、また Niccolò は Coppo と自分の妹を結婚させて、兄弟となって仲良く暮らした。Beatrice は日増しにフィレンツェの生活が気に入った。

第一日第二話（フォルケット）Tigoli（ティヴォリの訛り）に Cecantonio Fornari という貴族の老人がいて、子沢山の Giusto Coronati の娘 Lavinia を娶る。妻は老人の夫を嫌う。Fulvio Mecaro というローマの青年がたまたま Tigoli で Lavinia に見初め、友人の Menico Coscia と相談して協力を求めた。14-5才の若い娘を小間使いに雇うローマの習慣を利用して友人はタリアコッツォ出身の隣人に協力を頼み、隣人が故郷へ適当な娘を探しに行った20日から1か月後に、女のように小柄で美貌の Fulvio を女装させ、タリアコッツォ出身の少女 Lucia として隣人に Cecantonio の家へ連れて行かせた。こうしてうまくその屋敷に入り込んで一所懸命女主人に仕えて一か月も経たぬうちに、老人が何日かローマへ行って留守にした。女主人は Lucia を同じベッドに寝かせキス等をしてふざけているうちに、草むらに手をやって蛇にさわってびっくり仰天、もう一度ものも言わずに確かめて、夢かと驚き、ふとんをはねのけてまじまじと眺め、それから Lavinia は勇気を出して、「あんた、さっきまで女だったのにこれは何」と問い詰めた。そこで Fulvio は最初からの一部始終を打ち明けて許しを乞うた。女は自分が愛されたことに満足しそのまま女装を続けるよう命じた。そのまま何か月も過ぎたころ、老人が Lucia と寝たくてたまらず、妻に相談して罵られ、二度とそんなことをしないと約束したが、Lavinia が親戚の結婚式に出掛けて留守の間に Lucia を襲い、草むらの中の蛇を発見してびっくりする。Lucia は Lavinia とともに万一ばれた場合の弁解を考えていたので、この家に来た時には女だったのに三か月前からおかしくなり、恥ずかしくて人にいえなかったと泣くと、人の良い老人は完全に騙されて同情する。そこへ Lavinia が戻り当然夫を罵る。老人はローマへ賢人に相談しに行くとお発し、Lucia を雇う時世話になった Fulvio の友人 Menico と相談した。Menico は「こりゃ幸い」と相談に乗り、世間には良くあることですよ、と助言し、男の子が生まれる吉兆だから、Lucia を追い出さないようにと助言した。喜んだ老人は彼に礼金を1000フィオリノ与え、その助言に従ったので、Lucia=Fulvio はその後も自由に出入りして男子の出

生に協力した。

第一日第三話（ピアンカ）フィレンツェの裕福な大商人 Girolamo Cambini は madonna Agnoletta という市で最も美しく高貴な夫人を持っていたが、全く隙のない夫人は愛の神の復讐を受けて、市で一番若い修道院長に恋してしまった。彼女は人に弱みを知られないため、修道院長にも知られないままで小間使いの Laldomine を身代わりにして恋を実行しようと考え、彼女に女主人のでもなく小間使いのでもない特別可愛い服を着せて連れ歩き、たまたまある朝サンタ・クロッチェ教会で二人が修道院長にあった時、Laldomine は女主人に命じられたとおり修道院長に対して特別愛敬をふりまく。しかし修道院長に同行していたフィレンツェの青年 Carlo Sassetti が Laldomine に恋した。夫人の夫 Girolamo が市外に何日も出掛けた隙に、毎晩3時から4時（現代の夜11時から12時）にかけてあたりを散歩していた Carlo が、Cambini 家の階段の踊り場から外の小道に通じている窓から、中にいる Laldomine に突然話しかけたため、驚いた Laldomine が「誰かいるの」とたずねると、Carlo はとっさに「修道院長だ」と嘘をついて彼女を口説く。Laldomine はとにかく証拠がほしい、とハンカチを手渡し、明日の22時にこの家の出口の正面でこのハンカチで鼻をかんだら信用して入り口を開けてあげると約束し、あとで女主人に一部始終を語る。Carlo は修道院長に親しい友人 Girolamo Firenzuola（作者の弟）に事情を話して協力を求める。Girolamo は修道院長をうまく散歩に誘い出し、約束の時間に Agnoletta 夫人の屋敷の前で、まずハンカチを渡し、「はなが出ているからかみなさい」と勧めると、修道院長は何も知らずにチーンとはなをかむ。窓からそれを見た女達はそれを約束の合図だと信じこむ。Girolamo から準備が出来たことを聞いた Carlo は3時（11時）ごろ Agnoletta 夫人の家を訪ね入り口が開いていたので黙って入り、そこにいた Agnoletta 夫人を可愛い Laldomine だと信じてキスし、夫人も相手が修道院長だと信じて歓迎し、二人は相手を取り違えたまま大満足で一晩中楽しみ、夫人は暗い中で Laldomine と入れ代わり、Laldomine が夜明け前に Carlo に服を着せて送り出した。

第一日第四話（チェルソ）近年ピストイアの山地 Santa Maria a Quarantola 教会の don Giovanni del Civelo という神父が、教区の Giannone 通称 Ciarpaglia という村の最高の男達の一人の妻 Tonia に恋した。彼女は日に焼けて、「何年も地下に埋まっていた、大理石の柱の半切れ」のようなずんぐりがっちりした22才で、畑仕事もダンスも上手なこの上なくずる賢い女だった。神父の思いに気付くとまんざらでもない振りをして、いろいろと物をねだる。こうして2か月過ぎても神父は何も得られないばかりか、女の要求は側面が開いて革ひもで止める黄色の婦人用の靴とかいった具合に、エスカレートして行った。それでも神父は懲りないで、女が一人の時を見計らって菜園で取れた野菜のサラダなどをたずさえて訪問し、女の真正面に陣取って、ピストイアにあなたほどの美女はいない、神父でなければ結婚したのに等とかき口説く。女は「行って下さい。お世辞を言っても無駄」と言うが、神父はますます熱を上げるので、女はかつて彼女が彼に木靴を頼んだとき、継母のようないやな顔をしたとか、神父の隣人 Mencaglia が Tentennino の妻に対して別に何も求めないのに、ピストイアで最高の生地のスカーツの半分を払ってやったとか言って、彼の誠意の不

足を責める。神父は「君はとんでもない誤解をしている」と言って、ピストイアへ行く度に馴染みの女に2ポロニーニ与えていると言って、自分がいかに女性には気前が良いかを力説する。女はそれに乗じて、もしいやならピストイアの馴染みの女の所へ行くよう勧めながら、約束すれば神父の望みを適えてあげるからと喜ばせて、緑色のビロードの縁とか、緑色のリボンとか、麻糸の髪ネットとかいろいろ付いた黄色いサージの袖衣一對ややはり反物を買うための3ポロニーニ等を神父に約束させてしまう。神父は好機とばかり、袖衣の他に前にずらりとボタンのついた長衣まで約束して女の髪に手を伸ばした。女はお金の必要を強調するが、神父は教会へ戻って探すなどと先延ばしにしたため、女は先払いだと言い張り、やむなく神父はズボンに入れていた財布から6ソルドを与え、女は近くの小屋へ行くことに同意して神父の鐘は勝利の響きを鳴らした。またその後も神父がピストイアへ行くまでに何度か二人はその小屋で神父の鐘を鳴らした。ピストイアへ行った神父はネットだけしか持って来なかった。そして袖衣その他は家に忘れたという。女はとりあえずネットに満足したふりをして小屋に行くが、それ以後も神父は約束を一日延ばしにして果たさない。女は神父の約束を信じた自分の愚かさに気付く、怒って3〜4日彼の顔を見なかったが、復讐を決意して普通通り愛想よく振る舞う。そしてある日夫が Cutigliano へ行ったので家に来て欲しいと招待する。神父は「袖衣をだましたのにどうしたことだ。きっとあの女は俺にほれたのだ。贈り物などする必要はなかったのに、与えた俺はばかだった。二倍分取り返さないと大馬鹿者だ」とその日を待った。トニアは夫に神父が彼の名誉を汚そうとしつこく迫ると訴えて、夫の弟共々待機させる。意気揚々と女の家に来て来た神父は、家に迎えられて寝室で彼女を待つ間に、早くも服を脱いでベッドに入り、女が近付くとフランス式のキスをしようとしたが、その途端女の夫とその弟が現われて彼を取り押さえた。泣いて謝る神父のパンツを脱がせると、部屋の中の長持ちを空っぽにして、神父の立派な睾丸をその中に入れて蓋をして銃をし、そばに刃こぼれのした剃刀をおいて仕事をしに去る。神父は痛みの余り泣き叫ぶが誰も助けに来ず、ついに自分の手で睾丸を切り捨て、痛みのあまり悲鳴と共に気を失った。それでも人々の手当を受けて何とか生き延びることは出来た。

第一日第五話（フィオレッタ）聞き手が思い出せる程度の以前（1512-16年）、シエナの Camporeggi 区に、貴族でないがとても良い親戚に恵まれた裕福な未亡人 mona Francesca が、すでに数か月前に Meo di Mino da Rossia と結婚したが夫が久しく農園の管理に出て留守をしている娘とその弟の7才の男の子と共に住んでいた。母親はドメニコ派の修道士 fra Timoteo に見初められ、彼女も修道士が気に入る。二人はねんごろになり、母があんまり熱心にドメニコ派の教会に通うので近所では聖女扱いし始める。母の秘密を知った娘の Laura も早速 Andreuolo Pannilini という法学士の恋人を作る。母が夜中の2時（10時ごろか）にこっそり恋人を家に呼ぶと、娘も弟に友人の Agnesa に使いをさせ、彼女を通して恋人を呼ぶ。Laura と恋人は大声で騒いだので、母はその声を聞いて娘の部屋を覗き男がいるのでびっくりして駆け込み、嘆くとともに自分の娘と思わないと娘を叱る。娘は謝り、「私が悪うございました。どうか夫にだけは言わないで。寝る前に告解を受けておきたいので、あなたの部屋にいる修道士さんに会わせて下さい」と言ったので母親はびく

りした。カーテンの陰にいた娘の恋人が笑い出して「引き分けです」と判定し、「あなたが先に火を付けたのだから、あなたの方が先に悔い改めるべきです」と言う。母は「何でもするから私達の名誉を守って下さい」と頼む。母が修道士の所へ戻る時 Andreuolo もついていき、その晩4人で御馳走を食べ以後仲良くすることにした。法学士の方が修道士より少し年上だったので、娘は母を羨んだ。

第一日第六話（セルヴァッジョ）『デカメロン』と同様その日最後の語り手はその日の主題と関係のない主題を選びたいと断り、これまでの愛の主題とはあまり関係の無い話を始めた。

ロンバルディーア（今日はピエモンテ）の Novarra（ノヴァーラ）に Gaudenzio de' Potti の極めて裕福な未亡人である madonna Agnesa が4人の息子達と暮らしていた。サン・ナザーロ修道会の修道院長が Gaudenzio の死を聞くと、早速目を付けた。彼はスパイ達を配置して、未亡人が生まれるとすぐ嗅ぎ付けて、木靴をがたがた鳴らして付きまとい、フランチェスコ派修道会の革紐を付けた第三会員に仕立てて、毎回自分の説教に聞きに通わせ、御馳走や立派な法衣の贈り物程度では我慢せず、自分達の教会に小鳥に説教する聖フランチェスコ等その生涯の決まり切った場面を壁画に描いた礼拝堂や地所を寄進させてしまうのだった。素足に木靴を履いて説教して回っている振りをして、実はぬくぬくと腹を掻きながら暮らしていた。Agnesa は息子に済まない気持ちと、生来締め屋だったので容易にうんとは言わなかった。やいのやいの言われて口約束ぐらいはしていたが、その内に病気になる、臨終を迎えることとなった。告解に呼ばれた修道院長 fra' Serafino はいよいよ収穫の時とばかり、死後息子たちが蠟燭一本立ててくれない医者妻 madonna Lionora Caccia の例を挙げたり、自分と子孫の魂の幸福や家の名誉、その他いろいろな効能を並べて説教にこれ努め、もう少しではいと言いそうになった Agnesa は明日来てくれたら万事を解決しようとした。心配を感じた息子の一人で中の Agabio が兄弟に事情を知らせ、翌日 Agabio が母のベッドの下にもぐりこむ。修道院長は煉獄の苦しさ等を教えて、礼拝堂建設に200リラ、その他ミサを挙げるための道具一式に100リラを約束させて、また一年に一度祭と勤行を挙げるために、まだ分配していなかった Camigliano の地所半分、総額で3000リラ以上の寄進を約束させた。修道院長が去った後、こっそり抜け出した Agabio は兄弟に知らせ、親族はそろって Agnesa を説得する。Agnesa は成り行き任せにするつもりなので、息子共は修道院長をからかってやれと考え母からだと偽って修道院長に使いを送り、修道院長に子供達が失礼を働くかも知れないから、もう例の問題の催促には来ないで欲しいが、もし私に万一のことがあったら、遺言を作成した ser Tomeno Alzalendina のところへ行くように伝えさせた。数日後 Agnesa は息を引き取り、修道院長は ser Tomeno をたずねると、彼は Agabio に言われたとおり、もう Agabio に知らせたから彼に聞くようにと答える。修道院長は大至急 Agabio をたずね、Agnesa の遺言を見せて欲しいと望む。Agabio が関係の無いことにかまうなと答えたので、修道院長は自分に有利な内容だと確信し、修道院の法律上の代理人 messer Nicola に手続きを任す。代理人は、ser Tomeno に遺言の写しを引き渡させるよう司教代理に訴えた。その呼出しを受けた ser Tomeno は Agabio を訪れて、事情を伝

える。このことを待っていた Agabio は ser Tomeno と二人で司教代理を訪ねる。司教代理は Agabio ととても親しく、教区の神父なので当然修道士を嫌っていた。Agabio が彼にいきさつを話すと、喜んだ司教代理は翌日裁判所で遺言状の公開検討会を開くことにして、修道院長、代理人と Agabio, ser Tomeno 等呼び出す。司教代理の前で Agabio が遺言通り厳正に実行することを誓うと、司教代理は裁判所の公証人に Agnesa の遺言を読み上げさせる。遺言状には「将来愚かな女達やその憐れな子供達の財産が奪われないよう市内の全未亡人とその子供達の幸福のため、最高の仕方で最高のおならを50発サン・ナザール修道院院長 fra' Serafino に遺贈する」と記されていたため、大笑いとなる。修道院長は直ちに席を立てて法王庁の本部に訴えようとするが、Agabio が襟首をつかんでまだ遺言が実行されていないと引き留め、司教代理に馬を取り上げて遺言を執行するよう頼むが、司教代理は修道院長の地位やフランチェスコ派の勢力を考慮して Agabio を宥め、修道院長は遺贈を受ける意志はないから行かせてやるように勧めた。修道院長は何日も外出せず、もう未亡人に寄進を強いることもしなくなった。ただしある修道士によると司教代理はその後災難に遭い、500フィオーリーノ以上損をした。

ビアンカがセルヴァッジョに修道士をそんなひどい目に合わせておくと、あとできっとひどい仕返しをされるわよ、良くても悪くても彼らの悪口を言っでは駄目、と脅かす。陽が沈み始めたので女王は、夜（夕方）の空気は特に低地では身体に良くないというセルヴァッジョの忠告で別荘に戻る。途中でフィオレッタが夜の空気が何故身体に悪いのかと尋ねると、セルヴァッジョが湿気が多いからと答え、だから海や湖のそばよりも高地の方が身体に良いと語る。フィオレッタはその答えに満足せず、では高地は太陽に近いのに寒いのは何故かと問う。セルヴァッジョが答える前に、家に着き手洗いの水が配られ、すでに準備された晩餐の席に着いた。

晩餐の後ビアンカは食べる度に胃が痛くなるのに、食べるのがやめられないとバジリコの葉を罵る。女王が自然の贈り物を非難してはならない、パン切りナイフでも凶器に変わる。要するに使い方が悪いと忠告。バジリコの効用を問われて煎じ薬、湿布薬の効用を唱える。フォルケットが結婚する前に付き合っていた愛人の墓から出て来たような悪臭を除くため、人から教えられた通り、葡萄酒で煮たバジリコを用いると、悪臭は消えて息は麝香のような芳香に変わったと述べた。その時のバジリコの葉は細い方だったという。女王はバジリコには葉の広いのと細いのがあるが、薬用に役立つのは細い方で、広いほうは効き目なしであること、さらに中間のものは有毒だと説明したのでビアンカは納得した。女王はビアンカに今夜の眠る前の課題と明日のカンツォーネのテーマを決めるように命じた。ビアンカはしきりに辞退したが、今夜は女王の部屋で女性が行った当意即妙の返事を語り合い、明日は男性はだれか優雅な女性の美を歌ったセステーナを歌い、女性はある若者の徳と美を歌いましょうと提案し、部屋を代えてその夜の課題に取り掛かる。

（以下で、順に女性の巧みな返事を語る。女王から始める）一団の貴夫人の前で、大言壮語の男 Cesare Pierleone が男性を誉め、女性をけなし、madonna Paloza Arcione に「奥さん、あなたも金持ちの女よりも貧乏な男になりたいでしょう」と問うと、夫人は「男性が皆あなたのようならいや

ですね」と答えた。

(フォルケット) 貴夫人が馬鹿者をやりこめるのは大したことではないが、かつて召し使いの小娘が立派な紳士をやりこめたことがあった。ナポリの騎士 *messer Cola Siripanni* は耳の悪い召し使いの娘がある日ある言葉が分からないと言ったので、「お前はわしの言うことが全然分かん。わたしはお前の言葉がわかるのに」と怒鳴ると、娘が「そりゃあ私の方があなたよりも話すのが上手だからです」と答えたので、騎士は「成程」と納得した。

(ビアンカ) 村の小娘がアテネの学園を思わせる返事をする事がある。フィレンツェの大富豪の貴族 *Arrigucci Gualterotti* は彼が使っている農民の娘に恋して結婚した。彼の母親は善良な婦人で娘を我が子のように可愛がる。ある時おしゃべりの間にふと「あなたはあなたのお父さんの家でのあんな悲惨な生活をどうやって耐えていたの」と尋ねると、娘は「今私が昔同様、元気に陽気に暮らしているように」と答えた。セルヴァッジョの詩にもあった通り「しばしばぼろの服が、素晴らしい女を包んでいる。」

(チェルソ) 哲学に深入りし過ぎたようなので、出発点に戻る。話し手自身がシエナで法律を学んでいたころ、サン・ドメニコ教会からの帰途 *Tolommei* 家に嫁いだ、*madonna Ginevra de' Forteguerri* にあう。*Sapienza* 教会の出口で脚を縛られた豚が来るのを見て、彼女がお付きの少女に「この動物が通り過ぎるまで少し教会の中に引っ込みましょう。私は口を利かない動物が怖い」といったので、話し手が「口を利く動物とは何ですか」と尋ねると、彼女はすぐに「あなたがその一つです」と答えた。

(フィオレッタ) (私は妹として、フィレンツェ女がシエナの若者にした返事を話して、仇を取りたい。) ジュビレオの年、フィレンツェの *mona Selvaggia di Neri Foraboschi* が免罪を得るためローマへ行くが、従者の一人が貸し馬に乗ると片目だったので、*Piccoluomini* 家のそばを通っていた時、土地の若者の一人が、フィレンツェ人は盲目だという(ダンテも用いた) 諺に基づいて「この馬はフィレンツェの馬だ」という。聞き咎めた *Selvaggia* が「いいえ、この馬はシエナの馬です」と言い返す。相手が「どうして」と問い返すと、(シエナ人は獣という意味で)「獣だから」と答えて、普通自分の家の客にとっても親切にもてなす習慣があるシエナ人らしくない失礼な若者をやりこめた。

(セルヴァッジョ) ノヴェッラで許された特権を返事の場合でも許して欲しいが、同じ題材の話をしたい。*madonna Castora degli Almanni* がフィレンツェの習慣通り入り口で縫い物をしていた時、サンタ・クローチェ修道院の修道士がパンを求めてやって来て、召し使いの女がパンを取りに行った間に前日教会の屋根が壊れたと語り、「修道士が一人もいなかったのは奇跡だ。神様と聖フランチェスコが助けてくださった」と語ると、夫人は「台所の屋根が壊れなくて良かったわね。そこなら2人以上はいたでしょう」と言い返す。修道士はパンをもらおうと、もっと単純な信者の許へこそと立ち去った。

皆は大笑いしてから、セルヴァッジョにそうあからさまに聖職者を非難してはならないと警告し

た。すでに休息の時間が過ぎていたため、女王の命令で各自寝室に入って眠った。以下今日残されている第二日の断片。何故か第5話と第6話および額縁の断片が残されているが、恐らくそれ以外の部分は書かれていないのではないかと推測されている。

第二日第五話（記入なし。）所はペルージャ、時は Giovan Paolo Baglione 支配の時代（1500-20）ある尼僧院には持参金惜しさの両親の決定や継母の意地悪のため、多くの貴族の娘達が入れられていたが、院長自身ルーズなため規律が大いに乱れた。司教が英断によって、院長等一部を追放して真面目な女性と入れ換え、院長サンタ・マリーア・ディ・モンテルーチ尼僧院に40年以上いたという聖女のような老女を任命した。院長は尼僧達に午後3時以後最後の勤行までの間に、鐘をならして尼僧達を集め、少なくとも半時間は肉の誘惑から逃れるため神に祈らせた。若くて美しい Appellagia 尼はすでに墮落していたので悪習を断ち切れず、改革前からペルージャの貴族の若者と愛し合う。権力者 G.P. のお気に入りの彼は改革後逢い引きするのが困難になったので、うまく恋人の庵室にもぐり込んで3〜4日留まって恋人と愛し合う。Appellagia 尼は院長が鐘を鳴らすと何食わぬ顔でお祈りを済ませて、恋人の許に戻った。院長は彼女があわてて庵室から飛び出す姿を見て気を良くし、菜園で菜を摘んでいたためにお祈りに出なかった尼僧に、A 尼を見習うように説教した。彼女の行状を知る尼僧はそのために頭に来て、何か怪しいと感じて調べにかかり、ナイフの先で庵室の入り口の裏から紙でふさいだすき間を裂いて覗き、彼女が肉の誘惑から逃れるために用いている手段を発見した。早速院長の許に駆け付けて報告すると、院長は大剣幕で Appellagia の庵室に駆け付け、ドアをぶち破って彼女が誘惑を鎮めている現場を襲い、自分の改革が全く効果がなかったことを知って大いに嘆く。院長があんまり嘆くのになんざりした Appellagia は我慢できなくなって院長に「あなたは大間違いしています」という。訳を問われて、彼女が「あなたは肉の誘惑から逃れるために、鐘を鳴らして皆を集めお祈りさせているのでしょうか。それならこれ以上に良い方法はありません。お祈り等はむしろ欲望を強めるだけです」と答えたため、院長はこんな女を尼僧院にいやいや止めておくより追放したほうが尼僧院のためになると判断し、また男からの願いもあったので、好きな所へ行くように、彼女を追放した。その夜の内に彼女は男の家に行って休息し、何か月も鐘の音も聞かないのに肉の誘惑から逃れ続けた。

第二日第六話（フォルケット）ずっと遠い昔のフィレンツェに、Lapo Tornaquinci および Niccolò degli Albizi という血統が高貴で大変富裕な二人の親友が10年以上の付き合いを続けていたが、Niccolò の父が3万ドゥカート以上の遺産を残して死んだ。急に大金を持った Niccolò のまわりには大勢の取り巻きが集まって彼にたかったので、Lapo が忠告すると、Niccolò がうるさがる。当時のフィレンツェに若くて美しく、金持ちの青年と遊ぶことが好きな Lucrezia という未亡人がいて、Niccolò のお金に目を付けて惚れたふりをした。うぶな若者は、女の手練手管にすっかり騙され、惚れられたと信じ、Lapo の忠告などどこ吹く風で、とことんつきあって財産を使い尽くす。Lucrezia は Niccolò が文無しになったと知ると彼を袖にして、新しく財産を手に入れた Simon Davizi という若者に近付き、彼を恋人にして Niccolò に新しい恋人を見せつけた。すると Niccolò

はますます強く Lucrezia に恋したが、すでに一文無しの上に、取り巻きも全て消え、ただ借金取りだけが追い回すという境遇に落ちた。Lapo の友情がなければ自殺するところだが、この古い友情を思い出し、何よりも先に Lapo に会い、一部始終を語った。Lapo は忠告を無視されたことなど気に掛けず、もう言葉ではなく、行動で助けてやる必要があると述べて、自室に Niccolò を連れていき、自分の有り金全部を Niccolò に見せて資金にするよう勧めた。しかし同時に少し Niccolò の過去の行状を批判し、巧みに女の手口を非難したので、Niccolò もさすがに過去の在り方を恥ずかしく感じた。しかし Niccolò がまだ金を持っているのを見た Lucrezia は手紙や使いで Niccolò とのよりを戻して以前の交際を復活させた。ある夜 Niccolò が Lucrezia の家に泊まり、楽しみの後眠りこんだ時、Lucrezia の新しい恋人 Simon が訪ねて来て、玄関へ出た Lucrezia と話しているうちに、Lucrezia は家に入れ、入り口のそばの小部屋で楽しみ始める。夜中に目を覚まし Lucrezia がいないのを怪しんだ Niccolò は暗闇で服を着て、控えの間で楽しんでいる二人を発見、かっとなって男の首を切り落とし、女をめった突きにして殺した。召し使いたちが出て来たが、Niccolò は剣を持ったまま Lapo の家に向かう途中、警吏とばったり出会い、そのまま牢屋へ入れられる。Niccolò は拷問など必要なしに殺人を告白し、一度は死刑を宣告されたが、Lapo が奔走して友人を動員し、要路にお金をばらまいた結果 Niccolò はバルレッタ追放と決まる。Lapo は自らもバルレッタへ行き、友人の必需品を調達し、二人はそこで学問研究その他多くの活動に励んで第一等の市民となり、王や貴族達に大いに愛された。王達はフィレンツェ市民に圧力をかけ、Niccolò のナポリ移住を許可させ、その都市で立派に余生を送った。Niccolò が死ぬと Lapo は故郷にその骨を持ち帰り、サン・ピエル・マッジョーレ教会の立派な墓に盛大な葬式と共に埋葬し、自分の死後もその墓に遺体を埋めるように命じた。

座り疲れた女王と一行は、川沿いに散歩し、女王が森に居て水を見る喜びを語る。ビアンカが都市や家ではそういう喜びが感じられないのは何故だろう、とたずねる。女王は我々は四元素から成り立っているのだから、それらを見るのが好きだと説明する。田舎では土と空気を見るので喜びは二倍となる。さらに水が加わると三倍になると説明した。

散歩から戻った一行はオレンジ (melaranci) の木陰に準備されたばかりの食卓に着き、陽気に晚餐を取る。食事の最後に台所の男女の召し使いの間から騒ぎが聞こえる。一人の女が来て何かを嘆いたのでチェルソが叱り去らせた。女王はその時彼が用いた 'spigolista' という単語が『デカメロン』の作者の結びの言葉に出ていたのを思い出して、後のサンタ・マリーア・イン・ポルティコ枢機卿メッセル・ベルナルド・ダ・ビビエーナの従者がやったように、これまで固有名詞だと思っていたと告白し、その言葉の意味を尋ねた。するとチェルソはまず枢機卿の従者の誤りについて尋ねた。女王によると、メッセル・ベルナルドは1512年ナポリ総督がメディチ家の復帰のためブラートを包囲中の陣に使いした。その時、スペイン軍の要人がベルナルドに関係ある問題で総督と口論を始め、即座に部屋から飛び出す。総督は全く平然とした態度で、ベルナルドの従者に、あの 'mangiadero' を追っかけて呼び戻すように命じた。従者はその言葉が「馬鹿者」という意味だと

知らずに、相手の名前だと思って‘Signor Mangiadero’と呼びかけたため、相手は怒って彼を殺そうとし、皆がやっとのことで留めたと言う。それを聞いたチェルソは、‘spigolista’という言葉が1305年にサンタ・マリーア・ノヴェッラの修道士の指導でフィレンツェの女達が結成した、極めて戒律の厳しい宗教団体の名前に由来した、信心家ぶる人、迷信家、偽善者の意味だと説明した。

一同は席を立ててロジャに移動。そこでリュートの伴奏でフィオレッタとフォルケットの二人が踊る。その後女王が明日の作詩の題材とその夜の課題を決めるよう、フィオレッタに命じる。彼女は明日各自がソネットを歌うこと、チェルソのみは自分の誤りを反省して各行三音節の動詞で終わっているセステーナを発表するよう、またテーマは愛を論じていれば題材は何でも良いと述べた。チェルソが反論しフィオレッタが説明しているところでこの作品は中断している。

第四章 プラート時代のノヴェッラ創作

フィレンツォーラは1538年以前にローマを去り、フィレンツェの隣の田舎町でプラートのベネディクト派修道院に居を移す。すでに40代の半ばに達して、ローマで一応の文名を確立してはいたが、決して志を遂げたとは言えない都落ちであった。頼みの Clemente 七世もローマ劫掠後の7年間はローマ市民からも軽蔑され、実家のメディチ家のフィレンツェ復帰を実現するのが精一杯という有り様で、とてもフィレンツェ出身の知識人に十分な恩沢を施すゆとりなどはなかった。おそらく1534年の Clemente の死後もローマに止まっていたのは、勿論知識人との交友の便宜もあるであろうが、何とか一応の落ち着き先を求めているためであろう。だからフィレンツェから余り遠くないプラートでまずまずのポストが見つかったことは、彼にとって大きな転機であった。そしてこの時代に彼は結構いろいろな創作活動を行っている。純粋なノヴェッラはわずか2篇に過ぎないが、彼の代表作とも言える『動物達の対話の一枚目の衣装』や2篇の喜劇等も書かれ、ホラティウスの詩論の翻訳も行われていて、もしもこの時期がなかったらフィレンツォーラの文業ははるかに淋しいものになっていたはずである。本章ではまず2つノヴェッラを紹介して、従来通りフィレンツォーラが書き残した10篇の作品を概観した後、ノヴェッラと関係の深い『動物達の対話』をごく簡単に紹介しておく。

第一話「近年に生じ世間の噂に従って収録した M. AGNOLO FIRENZUOLA のノヴェッラ」近年のフィレンツェに、教会の十字架等に祈りを捧げて回る Zanobi di Piero di Cima という人物がいたが、妻子もなく年33と1/3%という高利で金を貸してアルテのコンソレになる一方、断食や勤行にも加わり、ついに持参金がないため結婚できない貧しい娘のために持参金として100リラを与えることを誓って適当な相手を探していると、その誓約を受けたサン・ロメオ教会司祭 Giuliano Bindi からそれを聞いた司祭と親しい寡婦 mona Mechera da Calenzano が、直接 Zanobi を訪ねて自分の適齢期の娘のために持参金を出して貰えるよう交渉した。女は約束を取り付けると、Calenzano

(フィレンツェとプラートの間の村)の司祭に Gianella という娘の結婚相手を探して貰う。女はそのお金をもうらために娘を連れてフィレンツェへ出掛けるが、婚約者がキアンティ地方に出掛けて留守なのでその代役に24〜5才の近くの日雇い男 Menicuccio dalle Prata を選び、美しい新品のシャツおよび靴と帽子を買うお金を与えるという条件で、娘の婚約者 Gianella として振る舞うよう頼み、フィレンツェへ連れて行く。Zanobi は三人を迎えると、騙されたくないのでは泊まって結婚を完成して行くように勧め、夕食を振る舞い、母を召し使いの老婆の横で寝かせ、若い二人を中二階の部屋に寝かせた。Zanobi に怪しまれるのを恐れた母は心配して色々指図し、男にも何度も誓約させ、二重の麻糸で娘のシャツも下着も縫い付ける。しかし寝て半時間もすると毛布の暑さで娘は太股や腹の皮膚病が耐え難くなり、シャツを脱ぎ捨てる。二人はベッドでごろごろしているうちにぶつかり合い、喧嘩したり仲直りしている内に、7〜8回交わる。翌朝毛布に血が流れているのを見て、母は事情を悟り、Menicuccio に口止めした。こうして Zanobi から朝食と祝福を与えられさらに100リラもらって村に戻る。2か月後本物の Gianella が戻って結婚し、数日後姑との相談なしにフィレンツェへ持参金を貰いに行くと、Zanobi から笑われ、怒ると「泥棒め」と罵られて、すでに新夫婦が泊まって行ったことを知る。書類を作っていなかったため司教代理による裁判となり、mona Mechera ら三人も呼び出され、Mechera は棒叩きの刑を受け、Mecuccio は40リラを払わされて、Gianella は目をつむって Sabatina を娶るべしという判決が下った。Mecuccio はそのため持っていた土地を売らねばならず、「初物は高くつく」という諺が生まれた。

第二話「プラートで生じたある事件についてのノヴェッラ」どんなに賢い狐でもつかまることがある。その一例はプラートで起こった事件。狡猾で世に知られた男、Santolo di Doppio del Quadro は世間のことを熟知し、頭を剃り、口髭を生やし、エプロンを着て、箆を持って広場を往来する、単純素朴だが決して人に馬鹿にされない。長い間織物に関わり、女の子に仕事を回す。女達が火の周囲で働いていると低い椅子にかけていて、女が紡錘を落とすと親切かつ丁重に拾ってやる。そして短い小話で大笑いさせてしまう。彼は誰か友人が結婚式を挙げると、この地方のしきたりに従って通せんぼをして、花嫁から何かを取り上げ、花婿をからかう。彼にはとても人の良い、誘うと決して断わることがなく、物を頼むと決していやとは言わない相棒 Fallalbachio がいて、いつも一緒に冷やかしに行く。Satolo もこの相棒がへまをしても決して怒らない。何故なら言われたことは何でも信じるし、沈んだ人を元気付ける良い奴だから。ある日 Santolo は相棒にその晩の結婚式を冷やかしに行こうと約束した。二人はせしめたお金で子山羊を買って料理して御馳走を食べようと張り切る。二人は花嫁の一行に「チップをおくれ。くれないと花嫁をさらっていくぞ」とおどし、花嫁は担保として指輪を抜いて「なくさないでね」と言って渡した。二人はその後毎晩大勢の紳士が賭博をしたり暇潰しをしている Antonio de' Bardi の家を訪ね、成果が上がったと知らせた。それから花嫁の近い親戚で Fallalbachio の女友達の美人の若い女 mona Amorriscia に会い、指輪を見せると、女は笑って真鍮の台座にガラスを嵌めただけの安物だという。言われて調べて見ると確かに安物だった。Fallalbachio はルビーだとか良い指輪だとか言い張るが、男友達に見せても安

物だと言われる。そこで彼らは御馳走の計画を放棄して Grignano のところでポッチャをして遊ぶ。土曜日の朝花嫁の Verdespina は二人組に使いを送り指輪を返して欲しいと伝えた。使いがもし返してくれればたっぷりチップをはずんで子山羊の料理も可能だというので、二人はからかわれているのだと思う。しかし30スクード以上の値打ちがすると聞いて、ようやく Amorriscia がすり替えたのではと疑い、会いに行って「指輪を返して欲しい」と頼む。追及された彼女は取るためでも侮辱するためでもなく、笑うためにしたのだと説明。彼らが怒っておどすと、女は子山羊二匹払わないと返さないと突っぱねた。花婿が使いを送って返して欲しいと頼む。Fallalbachio が Santolo に、仕方がないから子山羊を買おうと提案し、広場で二匹太ったのを買って来て女の許に運ぶ。女は日曜の夜一緒に食べに来るように勧めた。女の悪戯が知れ渡り、花嫁と花婿を始め大勢の仲間が集まり、二人が買って来た子山羊の御馳走を食べた。結局二人も笑い出す。宝石商も金銀細工もしたことがなかったので騙されたと説明した。

これらのノヴェッラと『愛の談義 (ラジョナメンティ)』のノヴェッラとでは、書かれた時期こそかなりはなれているが、内容的にそれほど大きな差がある訳ではない。そこで前章の8篇と本章の2篇の計10篇について、その舞台設定を眺めておく。

舞台

トスカーナ フィレンツェ 2 プラート 1 シエナ 1 ビストイアの山地 1

トスカーナ以外 ペルージャ 1 ティヴォリ 1 ノヴァーラ 1

複数の舞台 フィレンツェ+郊外 1

フィレンツェ+チュニジャの各地+メッシーナ+リヴォルノ+ピサ 1

フィレンツェに関係のある舞台が4と多く、トスカーナ全体だと7に及ぶ。イタリア以外の土地はチュニジャ各地が唯一とされている。やはりこの時代の内向的性格を反映する。

時代

遠い昔 (と言っても、13～4世紀) 2

父達の時代 (15世紀末頃) 1

16世紀初頭 2

近年 3

時代記入もヒントもなし 2

時代的にかなりいわゆるルネサンス時代に集中している。その前の中世中期以前はほぼ完全に省略されていると見なすことが出来る。日常的な話が多い。

登場人物の階層 (N=貴族, P=民衆, R=聖職者)

Nのみ 2

Pのみ 2

N + P (その内 1 は N を R と偽る)	2
P + R (P には N に近いものがある)	3
R + N (R のみとも取れる)	1

従来もそうだったように、N と P とを区別することは困難だが、一応単純に分類すると、N が関係するもの 5、P が関係するもの 7、R が関係するもの 4、と極めて接近しており、殊に『愛の談義 (ラジォナメンティ)』だけを取ると、5 : 5 : 4、しかもその第三話で N が修道院長 (R) を偽装していることを考慮して、R が主な登場人物に近いことを考慮すると、ほとんど均等に近くなる。このように三階層がほとんど同じ比率を占めていることが、この作品の特徴だと言える。民衆出身の作者が一応聖職者でありながら、極めて都市貴族に近い心性を備えていたことが、このような三階層間の均衡を生み出した。

『動物達の対話の一枚目の衣装』

プラートの親切で徳高い婦人達に作者は幸運を祈る。私は生まれ故郷のフィレンツェ、学生だったシエナとペルージャ、とても不毛に宮廷に仕えた結果長い病気という褒美を貰ったローマのいずれでもやさしい女性達の恩顧を受けたが、病気を癒したこのプラートでは特別深い恩恵を被ったので、強い忠誠心を感じていて、出来るだけご恩に報いたいと考え、この作品をあなた方に捧げる。それらの対話は(原作とは違った)新しい服を着せて新しい形に変えてある。大半は理性のない者達の対話だが大いに理性的に論じている。だからどうか針や紡錘から手を休められる時には、楽しみに読み、あなた方の召し使いのことを思い出して欲しい。気に入るようなら私が予定しているもっと大きな仕事の見本だと考えて欲しい。たとえ私がこの身を犠牲にしてもご恩の千分の一にもならないけれども。

本文の要約

プラート近くの **Bisenzio** 川の畔のメレットの都に **Lutorcrena** という偉大な人間の王がいて、**Tiabono** という優れた哲学者を顧問としていた。この哲学者は温和な常識人だった。(その実例としてウズラとハイタカの話¹⁾) 人に捕えられたウズラが鳥籠に入れられ窓際に置かれていた。ハイタカがそれを狙い、ウズラの祖母の友人だったから助けてやろうと誘うが、ハイタカの様子を見て疑いを抱いたウズラは、(キツネとハリネズミ) 油断してキツネのすすめる通り武器の針を脱いで眠ったためにキツネに食われたハリネズミの例をあげて誘いを断わり、羽根をばたばたさせたため、主人が来てハイタカを追い払った。ハイタカは逃げる途中ツバメに会い暴力でこれを捕えて食べた。ウズラは「外見に心の残酷さが出ていた」と納得した。だから **Tiabono** は今日の哲学者と違って温和な容貌の持主だったが、王は彼に友人達が第三者の中傷で憎み合いそうになった時いかに用心出来たかという実例を話すよう頼んだ。哲学者は早速話し始める。バルベリーノの農夫が二匹の牛を市に売りに行く。その内の一匹 **Biondo** はぬかるみに足を踏み込んで傷だらけになったので、友達に頼んで市に向かう。友人は他所へ行く用が出来たのと牛が貧弱なので **Biondo** を捨てて出発し、

後で農夫に Biondo は死んだと報告した。野原に捨てられた牛は回復して太り、連れが欲しくなり、大声でなく。その声が大きいののでライオンの王が脅えて穴から出なくなる。二匹の従兄弟の雄羊 Carpigna と Bellino がこれに気付く。Bellino が例を挙げて構わないでおこうと忠告した。(サルとオークの木) 木こりがオークの木に楔を打ち込んで倒しているのを見て、木こりが食事に行ったときにサルがすでに楔が打ち込まれたオークから、他の楔をはさまずに先の楔を除いたため、オークの幹で脚をはさまれ、駆け付けた木こりに頭を一撃されて殺された。しかし Carpigna は幸運は大胆な者の見方だとし、派手なクジャクと地味なカメの例で反論した。Bellino は宮廷では嫉妬に警戒すべきこと、宮廷人は君主に喜ばれる返事をしやすいが、助言者は不都合な結果が生じ易いことは謙虚に信義と愛とともに語るべきだ等と語る。しかし野心に駆られた Carpigna は王に会いに行き、自分が忠誠な臣下であることを示す。彼の言葉が気に入った王は主立った家来に法王 Adriano 六世が自分の親戚のドイツ人のパン屋をマルカの内乱を静めるために派遣して失敗した話を例に挙げて、適材適所の必要を説く。そして Carpigna を別室に呼んで密談を始める。Carpigna はライオンが宮殿から出て来ないので、国民は何か大きな原因があると悪意を持って見ていると伝えた。(カラスとスズメ) Sacca 修道院の農夫によってプラートの北西のモンフェルラートの丘の上で捕えられたカラスはフィレンツェの貴族 Tommaso del Tovaglia の許に送られる。Canneto 村の別荘の窓際にその鳥籠がおかれていた賢いので有名なカラスは、そこで大勢の動物の相談に乗る。多くの動物が救出に協力しようというが、プライドの高いカラスは「私は明日出る」と断わる。一羽のスズメが忠告しに来て、籠の水呑み口の下板が腐っているので嘴で突っつけば大きな穴ができて逃げ出すことが出来ると告げた。カラスは小スズメの言葉など無視するふりをしたが、結局は受け入れた。そこで王は Carpigna に恐怖を打ち明けた。Carpigna は王に例(キツネと鐘)を挙げてつまらないものに脅えることがあることを語る。川岸のキツネは教会のそばの木に縛られた鐘の音に脅えていたが、思い切って近付くと鐘だと分かって安心した。Carpigna は最後に自分が行って偵察して来ようと出発した。王は Carpigna が単なる中立の審判になったり、敵についたりしてはと大いに迷って彼の戻るのを待つ。王と家来達一同は戻って来た Carpigna を丁重に歓迎した。また別室に移ると Carpigna は Biondo は大したことはないが何時でも呼んで来れると報告。王はすぐ連れて来るよう頼む。Carpigna に誘われた Biondo は安全だと誓わせた後について来た。Biondo はライオンの前にひざまづき、これまでのことを話す。王は彼が気に入って副王に任命し、万事に彼を重んじて使う。Carpigna は宮廷を去って Bellino に会い、王と Biondo への恨みを述べる。Bellino は Carpigna が自分で自分の傷口を広げていると批評して、いくつかの入り組んだ話をした。(隠者と泥棒) Vernia の田舎に評判の高い隠者がいたので、その名声を羨んだ Gratugia という泥棒が弟子となる。隠者は弟子のまじめな精進ぶりを喜ぶ。しかし泥棒は隠者が近くの Bragazo へ行った隙に隠者の持物を持って逃げた。泥棒を追って隠者がピストイアに向かう途中(ヤギとキツネ)二匹のヤギが争って血を流していた。キツネがその血をなめようと首を突っ込むとヤギの角で篩のようにキツネの皮が穴だらけとなる。ピストイアに着いた隠者がある娼婦の家で泊まる。(娼婦と恋

人) 年取って商売できなくなった娼婦は美しい娘を手に入れて自分の商売を仕込むが、娘は若い恋人ができたため商売をさぼる。怒った娼婦は恋人を殺そうと、彼が自宅で寝ている時、毒の粉を入れた管を恋人の口に吹き込もうとして、自分も管の一端をくわえて男の口に他方の端をくわえさせると、相手が目を覚まして無意識に息を吐いたため、粉は娼婦の口に飛び込み、娼婦自身が毒を飲んで即死してしまう。隠者がさらに泥棒を追ってプラートに来ると、ある信者の家に泊まる。(床屋の妻の災難) 信者は用事で市外へ行くため信者の妻に隠者の世話を任せる。信者の若い妻は床屋の妻に夫の留守を知らせて恋人を呼ぶが、実は外出したというのは嘘で、信者は妻の浮気を見張っていたため、恋人が来たのを見て妻を裸にして下のロッジャの柱に縛り付けた。恋人は長い時間待っても信者の妻が迎えに出て来ないため、床屋の妻に会い様子を見て来て欲しいと頼む。信者の妻はやって来た床屋の妻に、恋人に一言伝えて戻ってから身代わりになるよう頼む。愚かにも交替した床屋の妻の所へ信者がやって来て名を呼ぶと、床屋の妻はばれないよう黙っていた。夫は怒って女の鼻を切り「悪い女め。恋人のところへ行け」と言う。戻って来た信者の妻は床屋の妻の不幸を悲しむが、彼女を家へ返すと、神に向かって「神様、罪のない私を哀れんで鼻を元どおりになおして下さい」と叫ぶ。そして夫を呼ぶ。起きて来た夫は妻の鼻が無事なのを見て奇跡が起こったと思ひざまづいて泣いて妻の許しを得た。床屋の妻は早朝暗闇で近くの修道院へ仕事しに行く夫のための支度を手伝い、鞆の中に剃刀だけしか入れないで置く。夫は他のものが入っていないのに気付いて怒りだし妻の鼻めがけて剃刀を投げる。妻は大声で泣いて夫が鼻を切ったと騒ぐ。妻の兄弟が呼ばれ床屋を裁判所へ連れて行く。ポデスタはろくに調べず床屋に50回の棒叩きと一年間のリヴォルノへの追放を命じた。全部の事情を知っていた隠者は床屋の無罪のため証言しに出掛けるが、たまたま泥棒を見付けて、彼を罰してもらい持物を取り返す。しかし滞在費の支払を済ませるとほとんど余裕がなく、床屋の役には立てなかった。裁判は金がかかり、賄賂が払えない貧乏人に勝ち目はないから。こうして Bellino は余計なことに首を突っ込むことや、有力者に逆らうことの不利を説く。しかし Carpigna は王の Biondo に対する寵愛は家来の反乱をひきおこすから、この復讐は国のために役立つと言う。Bellino は Carpigna の動機が邪心だと指摘。Carpigna は弱者も強者に復讐できるといくつかの例を挙げる。(ワシとウサギとフンコロガシ) ウサギがワシに追われフンコロガシに助けを求めたので、フンコロガシがワシに助けてやるようすすめるが、ワシはあざ笑ってウサギを食べてしまう。フンコロガシはワシの巣に入り、ワシの卵を転がして巣の外へ落す。ワシはゼウスに泣きついてその懷に卵を生むが、フンコロガシはゼウスの隙を見て懷に円い糞を運び込む。ゼウスは臭いものがあるので懷の中を叩き出しワシの卵も壊してしまう。(カラスとヘビ) Aiuolo の別荘の近くの木にカラスが巣を作ると、ヘビが卵を食べるのでカラスはキツネの助言を求めた。カラスは他人を利用する方法の例を挙げる。(トリとザリガニ) 年を取って昔のように動けなくなったトリが、湖の魚達に危険が迫っていると警告して、相談に来た魚達をもっと安全な所へ連れて行ってやると、山の頂上へ連れ出して食べてしまう。長い月日の後、最初にトリのニュースを聞いて皆に伝えたザリガニの番になると、空中でザリガニは先の方に仲間の残骸が散らばって

いるのを見て、真相を悟り、鋏でトリの首を挟む。トリとザリガニは地上に落下したが、ザリガニは上になったため助かり、湖に這い戻り仲間に事実を知らせた。この例に習いキツネはカラスに女の群のいる別荘へ行き指輪を取って来るよう勧めた。カラスはゆっくりと指輪を盗んで来て、巢のある木から下へ落すと、指輪はへびの巢のそばに落ちた。女の親戚の人々がカラスを追って来て、指輪を拾うとへびに気づき早速それを殺してしまった。Bellinoは牡牛のBiondoは簡単に倒せるほど馬鹿ではないというが、CarpignaはBiondoが自分を信用しているので利用できるという。(キツネとライオン) Rimaggioの山地でライオンが泉に陣取って動かないので動物達は渴え死にしそうになり四匹の代表がライオンと交渉して、泉を使う代わり毎日一匹ずつ仲間を差し出すと約束した。キツネの番になると、今朝はウサギの番だが早朝もう一匹ライオンが現われてウサギを食べてしまったと訴え、ライオンにけしかけて泉に連れて行き中を覗かせた。自分の影を見て怒ったライオンは泉に飛び込んで死んでしまう。他の動物は「やれやれ残った (rimasto)」と言ったので泉はRimastoと呼ばれることとなり、その土地は今もRimaggioと呼ばれる。Bellinoが摂理はそんなことを許さないかも知れないと警告するが、Carpignaは王の前に出頭する。王がその憂鬱そうな表情を見て訳を問うと、いろいろ勿体振ったあげく、Biondoが国の大物達相手に王の弱みを話して権威を傷付けていて、王に取って代わろうという野心を抱いていると中傷した。さらに(三匹の魚) 今日 Bernardo Salvettiの別荘のある Ghiandaia湖に漁師達が来た時、賢く用意周到な魚と、勇気のある魚と、怠惰で臆病な魚の身の上に起こったことを語る。用意周到な魚は安全な用水路に逃れ、勇気のある魚はつかまった時死んだ振りをして水に捨てられて逃れ、怠惰な魚だけがつかまってフライにされて食べられたという。しかしライオンの王はBiondoがそれほど悪いとは信じられぬという。Carpignaは王が与えた高位や恩顧が彼を増長させているとする。(ノミとシラミ) プラートの若い女のベッドにノミが住んでいたが、用心深く彼女が眠った後でだけ適度においしい血を吸って暮らしていた。ところが無神経で愚かなので大嫌いなシラミと出会い、これを滅ぼすため自分の住むベッドに案内した。シラミは大喜びで女の血を吸ったので、女は起きて明かりを点け、シラミを見付けて殺す。ノミはこうして嫌いなシラミをやっつけた。賢いやつは他人の力で敵を倒すので油断ならない。医師は患部を切除し、羊飼いは皮膚病がはやらぬ内に罹った羊を殺す。王はこうしたCarpignaの言葉に動かされBiondoを調べてもし有罪なら追放するという。Carpignaは露見したと知った彼が事を速めるので危険だと止め、自分が調べて来ると提案した。王に任されたCarpignaはBiondoと会い、また憂鬱そうな顔をする。Biondoが訳を問うと、王と家来達の間でBiondoを餌にかけける計画が進んでいるという。Biondoは自分は不正をしていないという。しかし世間では同類同士が結び付くが、自分は牛でライオンと違うことを認める。そして異質なものの不幸を語る。(ライオンとオオカミとキツネとカラスとラクダ) Usellaで二人の商人が倒れたラクダを捨てて行くと、オオカミとキツネとカラスが彼をライオンの宮廷に連れて行く。王は喜んでラクダを家来にした。ラクダは見違えるように元気になって活躍し、三匹の動物は嫉妬する。ライオンは狩りに行きゾウと戦って大怪我をして、食料が不足する。三匹は王を訪れ自分達肉食動物ではな

いラクダを食べようと提案したが、王がそこまでは出来ないと反対する。三匹は自発的に言い出したのなら構わないだろうと助言。そこで三匹はラクダを王の前に連れて行き、まず自分達が何時でも王のために自分を犠牲にして食べられる覚悟だと演説したのでラクダもやむなく同じことを述べると、皆は彼を捕えて食べてしまった。Biondo は自分もラクダと同じ立場だと嘆く。そこで Carpigna は誰でも身の安全を図るのは正しいと述べる。(二羽のコトリ) 夫婦のコトリの妻は川が増水したのでそのそばにある巣が危険だというが、頑固な夫は耳を貸さない。妻は嘆いて夫にカメのような目にあうわよと脅かす。(カメと二羽のトリ) Agnano の岸近くの断崖のそばの池にカメと二羽のトリが住んでいたが旱魃で困り、水の出そうなところへ行行って泉を掘ろうと相談したが、カメが自分は行けないと泣く。憐れに思ったトリ達は棒をカメにくわえさせその両端をくわえて飛ぶが、皆が驚くのを聞いて得意になり「おれは飛んでいるぞ」と叫んだため落ちて死んだ。その跡に messer Antonio Maria の雇っている農夫の家に近い泉が湧いたというのが真偽は定かでない。夫は妻の意見はもっともだと思うが、それでも従わない。Bisenzio 川が増水して巣は流された。このことを夫は他人事としてコウノトリに話すと、弱者が強者に反抗してもむだだと忠告された。Carpigna は Biondo に王に対して毅然とした態度で臨めと助言。Biondo がそのとおり偉そうにすると、王はそれに気が付き、やはり Carpigna は正しかったと信じて飛び掛かり長い戦いの内に Biondo が殺された。それを知った Bellino は Carpigna を叱る。(小鳥とサル) サルがホテルを火だと考えて吹いているのを見た小鳥がそれは火ではないと忠告すると、サルは「お前は暇な奴だ」と罵り吹くのを止めない。小鳥がさらに忠告し、三度めにサルは小鳥にとびかかり小鳥は辛うじて逃れた。(夫婦とカササギ) Bachereto で金持ちの商人の妻が恋人を作る。召し使いは全員妻の味方なので、夫は怪しみつつも正体がつかめない。夫は鳥籠のカササギをスパイにすると、カササギは妻の浮気を夫に報告した。夫はカササギの言葉を聞いて妻を棒で叩いて罰した。怪しんだ妻は召し使いを叱ると、彼等は互いに調べてカササギがスパイだと発見した。妻は夫の留守に恋人を呼ぶが、同時に三人の女中達に鐘の音と鏡の光と海綿の水で一晩中カササギを驚かすように命じた。帰宅した夫がカササギに昨晚の様子を尋ねると、一晩中大変な雷雨で何も見えなかったと答えた。夫はカササギが嘘をついていたと信じて殺してしまう。だから余計なことに首を突っ込んではいならない。(二人の歩行者とお金) 二人の歩行者がお金の袋を見付けるが、狡い方の提案で大部分を埋めて隠しておく。狡い方が掘り出して取ってしまい、正直者に罪をかぶせるためボデスタに訴えた。ボデスタが実地検分すると知り、狡い方は父に頼んでお金を隠した木の洞の中に潜んでもらう。父は息子に例を挙げて論ず。(ヘビとザリガニとトリ) 巣の近くに住むヘビに雛を食べられたトリは、復讐のためザリガニに相談すると、ザリガニはトリを洞穴に案内した。そこには作者は名を知らないが、何かヘビを食べる動物がいた。ザリガニはトリに魚を取ってその洞穴の出口からヘビの巣まで並べておくよう勧める。その通りにすると動物はヘビにたどりついて食い殺したが、ついでにトリの巣の雛まで食べた。このように人を陥れると自分にも害が及ぶ。しかし父は息子のために木の中に隠れていて、ボデスタが木に対して犯人を問うと父が正直者がやったと答えた。ボデスタは怪しみ木のまわ

りに木材を集めて火を付けさせる。父は熱くなったので「助けて」と叫び悪事がばれ、正直者にお金が与えられ悪人親子は正当に処罰された。（雪の子）ヴェルニアに Mercatale という富裕な農夫がいて美しい妻を持つ。彼女は領主の一人に恋して、夫が冬の間移牧のため Meremma へ羊を連れて行った間に関係し、妊娠してこっそり子を産む。一旦人に預けた後取り戻して育てる。夫に問われると去年はひどく寒くて、4月30日に雪が降った時、遊びに出てびしょ濡れになり、気がついたら雪の子を孕んでいた、だからこんなに色が白いと説明した。夫は納得したふりをするが、ある日雪の子を連れ出して連れて戻らなかった。二日後心配した妻が夫に雪の子はどうしたのかと尋ねると、雪の子なので太陽の下を連れ歩くと溶けてしまったと説明したので、妻は何も言えなかった。Bellino は Carpigna に悪事は必ず露見すると語り、自分は従兄弟だがお前を信用できないという。

（鉄の商人と不正直な友人）大量の鉄を持った商人が旅行に出た間に留守を頼まれた不正直な友人が鉄を売り、ネズミが食べたと説明した。商人は友人の美男子の子供を隠し、先程ワシがゼウスのところへ連れて行ったと説明したので、友人は謝り鉄の代金を払って子供を返してもらった。やがてライオンは今までの経緯を反省して Biondo は無実だったと確信して、Carpigna を調べる。Carpigna は君主はたとえ悪意を持たなくとも危険をもたらす恐れのある者は除くべきだというのが、王は彼を投獄して取り調べさせると、欺瞞が明らかになったので、Biondo の名誉のために Carpigna を血祭りに上げた。こうして哲学者の話は君主は嫉妬深い家来の讒言にいかに関心すべきかを明らかにした。王は君主の責任の如何に重大であるかを悟ったと述べ、神が君主に対するように、君主も大臣に対して振る舞い、特にその不正は厳しく罰しなければならない、しかし危険や困難においては、善のために人事の限りを尽くしながらも、最後は神に頼り身を委ねるほかないと述べた。

（おわり）

注

第一章

- 1) 米山喜晟・鳥居正雄, イタリア・ノヴェッラの森, 大阪1993。(御希望の方には無料で差し上げます。)
- 2) Agnolo Firenzuola, *LE NOVELLE*, a cura di Eugenio Ragni, Roma 1971.
- 3) Id., pp. XXXII-XXXIV.
- 4) Agnolo Firenzuola, *OPERE*, a cura di Adriano Seroni, Firenze 1958.
- 5) Id., pp. XL-XLIII.
- 6) Vittore Branca, *DIZIONARIO CRITICO della LETTERATURA ITALIANA*, Vol. II, Torino 1974, pp. 91-93.
- 7) Seroni, op. cit., p. XL.
- 8) Ragni, op. cit., p. XXXII.
- 9) *Discacciamento de le nuove lettere inutilmente aggiunte ne la lingua toscana*. in Roma, per Lodovico Vicentino e Laudisio Perugino, 1524.
- 10) Ragni, op. cit., p. XXXIII.
- 11) Seroni, op. cit., pp. XLI-XLII.
- 12) Ragni, op. cit., p. XXXIV.

- 13) *Prose di M. Agnolo Firenzuola Fiorentino*, in Firenze 1548, appresso Bernardo Giunta としてまず刊行された。

第二章

- 1) 米山喜晟, 紙の上の宮廷—中世・ルネサンス期イタリアにおけるノヴェッラ集の枠組の変遷—東京1990参照。
- 2) Marziano Guglielminetti, *La cornice e il furto Studi sulla novella del' 500*, Bologna 1984.
- 3) Guglielminetti, op cit., pp. 52 sgg.
- 4) Ragni, op cit., p. 28, n. 2.

第三章

- 1) Ragni, op. cit., p. 6.

第四章

- 1) カッコ内の小見出しは Ragni, op. cit., pp. 205-206 のタイトルに準拠している。

(イタリア史, イタリア中世文化専攻)